

聖書箇所：ルカの福音書9章28～36節

説教題：光り輝くイエス

1 なぜ光り輝くのか

前回の箇所で、イエスは弟子たちにこう語りました。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」

このようにイエスをご自分の最期についてはっきりと弟子たちに明かされたのは、これがはじめてです。弟子たちのなかでこのことばを理解した者はひとりもいません。「そんなことはあるはずがない。絶対にイエスはイスラエルの王となるはずだ。」それが弟子たちのゆるがない確信です。

イエスはそんな弟子たちの中からペテロ、ヨハネ、ヤコブの三人を連れて、あるとき山に登ります。イエスが逝っておられると御顔の様子が変わりました。弟子たちが普段見ていたイエスの表情とはまったく違います。そして御衣は白く光り輝いたともあります。

なぜイエスの御衣が光り輝いたのでしょうか。「イエスは神のひとり子だから、ご自身で神の栄光を現したのだ。」みなさんはそう思うでしょう。しかし仮にそうだとしたら、ではどうしてこの時、イエスをご栄光を現そうとするのでしょうか。そしてもう一つの疑問。イエスの栄光と書かれているけれど、いったいそれは何のことなのか。

きょうはそのことを考えていきます。

2 イエスの栄光とは

(1) 「幕屋を造ります」

そのイエスの栄光ということばが32節に出て来ます。「ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかつたがはつきり目が覚めると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。」

ふたりの人とはモーセとエリヤのことで、31節を見るとこのふたりも栄光のうちに現れています。どれも同じ栄光に思えますが、よくみると違います。「イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。」イエスのこととモーセとエリヤのこととを区別していることに気がつきます。

このあとペテロは、とっさの思いつきでこんなことを口にします。33節。「先生。ここにいることは、すばらしいことです。私たちが三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」

ペテロが言っていることを、わかりやすくかみ砕けばこうなります。「こんな光景を見られるとは、自分はなんとラッキーだろう。先生。ここに三つの神社を建てましょう。」

ペテロの言っている事は本当に日本人の感覚そのものです。日本なら確実に神社が建ったでしょう。しかし、聖書はいとも簡単にかたづけれます。「ペテロは何を言うべきか知らなかつたのである。」ペテロが口にしたことはまったく的外れでした。なぜ的外れであったのか、その理由は30、31節で説明されています。

(2) 神殿がこわされる：エルサレムでの最期

30, 31 節。「しかも、ふたりの人がイエスと話し合っているではないか。それはモーセとエリヤであって、栄光のうちに現れて、イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期についていっしょに話していたのである。」

ペテロが建てましようと言った「幕屋」は、モーセの時代に神の命令によって造られたものです。イスラエルの人たちがエジプトから脱出し、荒野を旅しながら、人々は幕屋に集まり礼拝しました。のちにこの幕屋は姿を変え、ソロモンの時代になったとき、すっかりした建物としての神殿に生まれ変わっていきます。ペテロはここに三つの幕屋を建てましようと言いましたが、それは神殿を建てましようと言ったのとまったく同じことでした。

いっぼうイエスとモーセとエリヤが話していたことは何であったか。エルサレムで遂げようとしておられるご最期についてです。これが何を指すのか、みなさんはおわかりでしょう。「人の子は、必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちに捨てられ、殺され、そして三日目によみがえらねばならないのです。」このことを指します。

ここまでは、イエスが殺されることとペテロが口にした幕屋や神殿のこととは何の関係もなさそうに見えます。ところがヨハネの福音書2章19, 21節にこうあるのです。「イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。」「しかし、イエスのご自分のからだの神殿のことを言われたのである。」

ペテロが軽々しく口にした「幕屋」という

ことばでした。ところが意外なことにかなり重要なテーマが隠されていました。ペテロは、イエスの栄光を見たとき、ここに幕屋、あるいは神殿を建てることこそイエスの栄光にふさわしいと考えました。

一方イエスのお考えはまったく反対です。イエスは苦しみを受けられます。捨てられていきます。そして十字架で殺されます。イエスのご自分のからだのことを神殿であると言われています。殺されるのですから、神殿がこわされていく。それがイエスの向かおうとされている方向でした。

ペテロが口にしたことがなぜ的外れであったのか、これでおわかりいただけでしょう。

3 父なる神の励まし

(1) 栄光を現す

さて、最初に挙げておきました問題に戻ります。ペテロたちはイエスの栄光を目撃しました。いったいだれがイエスの栄光を輝かせているのでしょうか。

イエスのご自分でご自分の栄光を現そうとしたのでしょうか。しかしヨハネの福音書17章5節にこんなみことばがあります。「今は、父よ、みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光で輝かせてください。」

このみことばを見ると、イエスのご自分の力でご自分の栄光を輝かせていたのではないことはあきらかです。ではだれがそうしたのか。父なる神が、イエスを通して栄光を現して下さっていたのです。

(2) イエスの栄光とは

ではイエスを通して現された栄光とは、どのような栄光だったのか。それが次の問題です。

イエスは、モーセとエリヤと語っていたのは、エルサレムで遂げようとしておられるご最期についてです。自分がやがて十字架で殺される。そのことについて詳しくあれこれ話し合っています。楽しい話題ではありません。イエスにとって最もつらい話題です。

どれほどつらいことでしょうか。「罪のない神のひとり子が、私たちの罪を背負い、父なる神のさばきをお受けになる。」キリスト教の中心となる教えです。何度も聞いていて、頭の知識としては知っています。そして、「イエスの十字架で救われました。よかったね」で済ませてしまい、それ以上深く考えることは希です。でも、私たちはもっと考える必要があるのかもしれない。神である方にとって十字架がどれほど耐え難い苦しみであったのか、そのことをです。

十字架は父なる神に捨てられる場所です。愛する父から完全に見捨てられる場所です。あのゲッセマネの園で、「みこころならばこの杯を取りのけて下さい」と祈らざるを得なかった場所です。

イエスの栄光は十字架の上で現されていきます。十字架に向かう道で現されていきます。それ以外の場所で現されることはありません。神の力をことさらに示すための栄光ではありません。神である方が苦しまれるときに現されていく栄光です。

(3) 苦しみをともにされる父と子

父なる神はどうしていたのでしょうか。ひとり子であるイエスの苦しみをもちろんすべて知っておられます。イエスは神なのだから、

あなたひとりでがんばって十字架に向かって下さいと突き放すような方ではありません。父なる神は三つの方法で、苦しみに向かって行かれるイエスを励まそうとされます。

一つ目のこと。先ほども触れましたが、イエスを通して栄光を現して下さったのは父なる神であると言いました。なぜそうされるのか。イエスを励ますためです。天におられる父なる神が、十字架に向かおうとされるイエスを全面的には励ますためにそのようにされました。

父なる神の励ましの二つ目。神はモーセとエリヤをイエスのところに遣わします。

そして三つ目。父なる神ご自身がお語りになります。「これは、わたしの愛する子、わたしの選んだものである。」こう言ってイエスを励まします。

愛する子どもが、十字架で苦しみを受けようとされる。愛する子どもを自分の手で十字架でさばかなければならない。普通、父親はそんなことができまらぬでしょうか。どんな理由であれ、私にはできません。アブラハムがイサクをささげなさいと神の命令を受けたとき、アブラハムは従っていったと聖書にあります。でも、私は不信仰と言われようともそんなこと絶対にできません。

神はどうされたのですか。イエスは自分の愛する子であると言われます。その愛する子が十字架につこうとされている。イエスお一人が苦しんでいるわけではありません。父なる神もともに苦しんでおられます。愛する子を十字架に送らなければならぬ。どれだけ心が引き裂かれるような思いであったのだろうかと考えます。それなのに、なぜイエスはなお十字架に向かおうとされるのでしょうか

か。

理由はひとつしかりません。神が私たちが愛するからです。私たちが滅んではならない。生きなければならない。これ以上罪の中で苦しんではならない。神がそのように思っ下さるからです。それは、どれほど強い思いでしょうか。

ペテロは何も理解できず見当外れな事を口にしました。それでも神はペテロのためにいのちをお捨てになります。ペテロはイエスを三度否定します。それでもイエスはペテロのために十字架におつきなります。

私たちも同じです。イエスのことがよくわかりません。みことばの意味もわかりません。けれども、神はそんな私たちのために、私たちが信じる前に、私たちのためにいのちを捨てて下さいました。

神である方がいのちを捨てになり、私たちが救おうとされました。そこまで下さったのなら、これから先のことはどうなると思いますか。あとは知りません。あとは自分で努力してください。そんな中途半端なことなのですか。そんなはずはありません。神である方が十字架でいのちをお捨てになったというのなら、とことん私たちのために最後まで責任を引き受けるのは当然ではないですか。

十字架で現されたイエスの栄光の意味をひとつひとつ味わいながら歩んでまいります。